久留米信愛短期大学研究紀要，第 45 号，71¯79（2022）
KURUME SHIN-AI COLLEGE BULLETIN ， No. 45 71¯79(2022)

保育者養成校における言語表現の授業改善に関する一考察
～授業の振り返りと学期末レポートの記述に着目して～

桑原広治・森久美子

A study on class improvement for language expression at training schools for nursery-school teachers
-Focusing on the review of the classes and the description of the term-end reports-

KUWAHARA Hiroharu and MORI Kumiko

Abstract
The purpose of this study is to improve classes with the “thinking power” required in the field of education. At the practical training site visits, we are pointed out about typographical errors and sentence expressions by students in the reports of teaching practice that are repeated every year. It is difficult for students to change their consciousness that “they are not good at writing and not good at speaking.” Even as the 18-year-old population is declining and women´s tendency toward 4-year colleges/universities is increasing, junior colleges and vocational schools must send human resources who will become “ready-to-work with practical skills” to the childcare field in two years. Therefore, in the language expression class, we made them aware that they would stand on the same starting line in April of the year of employment in two years.

Key words: inter-subject collaboration, reading comprehension, summarizing ability, vocabulary, output

キーワード： 科目間連携、読解力、要約力、語彙力、アウトプット

1　問題の所在と研究の目的

「短大の４大化」も聞こえてくる中で、２年間で「実践力を備えた即戦力」となる人材を保育界に送り出さねばならない。入学した学生のスタートラインは皆違う。個々の教員として、組織として考えておくことは目的意識を共有することである。そのよりどころが「建学の精神」に他ならない。

短期大学の今後の在り方によれば、短期大学の課題として、学生・社会のニーズを踏まえた検討の必要性では「女子の４年生大学指向と職業教育志向のはざまで短期大学の特色が見えにくくなってきているとの指摘もあり、今後の短期大学の在り方の検討に当たっては、短期大学側の視点だけではなく、学生・社会のニーズを

踏まえた検討が必要である。短期大学は進学してくる学生も多様化しており、必ずしも基礎学力が十分ではない学生や経済的に厳しい状況にある学生の増加に伴い、一人ひとりの学生の課題へのきめ細かい対応が一層必要となっている。」（１）と指摘する。

入学してくる学生の中には、スタートライン（入学時）から「文章が苦手、話すことが苦手」という現状に、学生も教員も２年間の忙しさに甘んじてきたところはなかったか、このことが頭から離れたことはない。経験知の少ない学生に保育原理を身近なものとして理解してもらうには、「短期大学と現場の乖離」を限りなく近づけることが重要である。教員には、２年間という短い期間に「大学と現場をどうつなぐか」を教材研究のベースにおくことを考えが求められる。2 年後は、短期大学の卒業生だけでなく、専門学校、４年生大学など様々なキャリアを積んだ卒業生が同じスタートラインに立つ。まず、教員は４年生大学との違いを念頭に置きながら、短期大学の保育者養成を考える必要がある。ともに、「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」の育まれる比重が異なることにある。つまり、４年生大学は、「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」を４年間かけて取り組むことができる。しかし、短期大学は、２年間で専門知識が中心のカリキュラムで実践力を同時に育むことが求められる。

多田は「近年本学保育科の学生は学力と意欲の両面において格差がみられる。課題の意図を汲み取れずに適当に済ませる、保育者としての想像力に乏しい、みずから学びのサイクルを実施できないなどの学生も目立っていた。こういった学生は、これまでの学習生活の中で、みずから学ぶという経験や努力をして何かを達成した経験が少なかったのではないだろうか。もう一歩踏み込んで言えば、そうならざるを得ない現状が学生たちの環境にあったとも言えるのかもしれない。もしそうであるなら、この学生たちは、教員側から適切な学びの環境やしかけを提供できれば、むしろ伸び代が大きく、可能性の高い学生たちであると言えるだろう。」（２）と述べている。

短期大学の今後の在り方（４）では、学生に対する支援の充実として「短期大学は、４年制大学と比較すると学費は低廉であるが、経済的に厳しい中で短期大学に進学してくる学生も多く、アクセスしやすい身近な高等教育機関という特長からすれば、学生支援の在り方等についても検討が必要である。」（３）と述べている。

本研究は、入学した学生のスタートラインを踏まえて学生理解に努め、筆者が主に担当する他の科目等（保育原理、人間関係、保育・教職実践演習等）の「科目間連携」と「逆向き学習法」で「考える力」を２年トータルで醸成する授業実践である。よって、各科目の授業では、関連する内容は一人ひとりの学生に寄り添う「授業改善」を図りながら「繰り返す」ことになる。

毎回の授業での振り返りを自分の言葉で考察する学びを通じて学生が成長し、変わっていく様子は説得力があるのではないか。学生にとっても「言語表現と自分の仕事」とのつながりを実感し、何かを判断する時の基準になっていくことが理解できよう。

あらかじめ、言語表現の専門的な手続きを経た研究ではないこと、数量的な分析を用いた研究ではないことを断っておく。

２　研究の方法

（１）　対象及び方法

１年次後期開講の卒業必修、資格免許必修、科目「言語表現」

受講生　３７名

１５回の講義とともに、筆者の担当科目（日本国憲法、保育原理、人間関係、保育・教職実践演習等）を科目間連携の観点で授業を展開する。

学生は、授業の「振り返り」を自分の言葉で「考察」できる力をめざす。さらに、授業では、「考察の共有化」を図り、学生個々の「考える力」を高めるための授業改善の研究を進めていく。

なお、授業の「振り返り」は、前半がシート

での振り返り、後半は「チャットメール」で提出する。

（２）　倫理的配慮

本研究の性質上、学生の授業の振り返りを取り上げる。その際、学生には、氏名なしで「情報共有」のためにスライドで共有することを、学習する視点から研究参加の同意を得ている。

（３）当事者意識と「つなぐ力」を意識した授業実践

授業改善にあたっては、科目間連携と逆向き学習法で授業を進める。

逆向き学習法とは、学生が入学し、２年後に保育現場に就職する４月を想定し、必要となる資質能力に優先順位をつけ、学生の実態との相関を考えて授業展開していくものである。

学生には、同じことを繰り返していると思わせない「関連」の視点となる解説や授業展開が重要である。なお、逆向き学習を進めるにあたって、個人差に対応するために「２年間を個々の能力に応じてトータルで指導する」ということである。

３　研究の実際

授業を進めるにあたっては、筆者が担当する科目（日本国憲法、保育原理、人間関係、保育教職実践演習等）は、すべて「科目間連携」の視点から授業の基本的な流れは同じである。言語表現の授業の始めに日本国憲法の基本的人権（第１１条）について取り扱う。なぜなら、基本的人権には「生存権や表現の自由などいろいろな権利が含まれており、保育者として子どもが尊重されているかを常に意識して自らを問い返し、学んでほしいからである。また、「生存権」（第２５条）では、「子どもにとって『健康で文化的な最低限度の生活』とは何かを意識して、子どもや保護者の生活に目を向けてほしい」。これらを踏まえ、１５回を通して、人権をベースに置いた言語表現の授業を展開する。そして、筆者が担当する科目間連携も意識して学びの往還に取り入れる。

そこで、学生が主体的かつ積極的に学び、アウトプットできる専門性を育てるには、どのような授業展開が効果的であるかを具体化して取り組み、その効果を考察して次年度以降の授業にいかしていきたいと考えた。

（１）　学生理解のための現状把握

学生のスタートラインはみな違うという観点からスタートする。

漢字が苦手で語彙力、読解力、要約力にも課題がある。卒業生も在校生も実習日誌等で書くことだけに時間をとられてしまい、漢字等に自信がなくても確認しないまま提出することが多く、園から指摘を受けている現状がある。すぐにできることは、普段から授業中に分からない漢字や言葉は辞書を引く習慣をつけることが、早く辞書を引ける近道である。

ある園長先生からお手紙をいただいた。

「先生おはようございます。本人にも伝えましたが、文字が小さく、くせのある字もあり、４月からの就職に向けて困るかもしれません。気をつけて書くこと、漢字は少し大きめに書くことを伝えましたところ、最後の方のノートはとても読みやすくなり、御礼のお手紙をいただきましたが、これも丁寧に書いてありとても読みやすかったです。当園は連絡帳アプリを導入しており、Ｉｐａｄでの入力となりますが、まだノートに記入しているところもありますので、4 月に就職した園さん次第です。」とある。これも「現場と大学」の連携の一つで将来の保育者を育てる共通の視点である。

（２）　学習の構えを作る

学習の構えとは、小学校１年生で最初に指導する「起立の仕方」、「礼の仕方」などの立ち居振る舞い、「話し方」「聞き方」等を基本的生活習慣・学習習慣の一環として指導を行うが、大学生であってもできていなければ指導していくのが教育である。また、教科であっても、「どこでつまずいているか」を見抜く力こそ、専門家としての教師であろう。

筆者が繰り返し指導していることは大学生であっても「辞書を引く」ことであるが、残念ながらなかなか定着しない。実習先で日誌の誤字脱字を指摘されても変わらない。どこに問題があるか。それは、学生の当事者意識と、現場と大学の乖離に問題があるのではないか。

ある学生は「今日の授業は、最初に語彙トレ（トレーニング）があった。まだまだ私は、漢字が不得意だと感じた。これから日誌を書くために、今その準備をしていると思って、漢字を習得しないといけないと思った。また大事なポイントとして、ポストイットや「メモ帳にメモ」をとるという言葉が出てきた。私の祖父は、よくメモをとり、常にミニ辞書や花図鑑を携帯している。自分の知らない言葉や疑問に思ったことは、メモ帳に書いて必ず調べている。祖父は知らない事が少なく、私に沢山の知恵や言葉の意味を教えてくれる。今でも知らない言葉の意味が出てくると、祖父に電話をかけて意味を聞いたりしている。しかし、授業にでてきた言葉や、祖父が行う行動を見ていると、分からないことは調べて理解しているから、それが自分の知恵になっていることに気づいた。私は保育者になるので、子どもたちには、なんでなの？どうしてなの？これはなに？など、沢山のことを聞かれるだろう。知っていなくても大丈夫と思っていた私が、知らなくては子ども達に何も教えられないではないかと、今回あらためて感じさせられた。子ども一人ひとりの未来に影響を与える存在として、自分の知らない事にも挑戦し、また新たな自分の気づきにしたいと思っている。」と授業の振り返りで考察している。このように、短大生だから、時間がないから調べることは必要ないではなく、保育者になる前に、今だから辞書や調べる習慣が必要なことに気づきつつある。

（３）授業計画

（１）言語教育を学ぶ意味

教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則五条である。普通免許状は、別表第一、第二の二に定める基礎資格を有し、かつ、大学もしくは文部科学大臣の指定する養護教諭養成機関において別表第一、第二もしくは第二の二に定める単位を修得した者又はその免許状を授与するために行う教育職員検定に合格した者に授与する。

「言語表現」は幼稚園教諭 2 種免許にかかわる科目であり、小学校学習指導要領に準じ、小学校国語科の内容である「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」について学び、幼児教育・保育と国語科指導における幼児・児童への指導・援助についての理解を深める科目である。

幼児期の教育に携わる幼稚園教諭・保育士には、幼稚園・保育所で過ごす３歳児（保育所では０歳児）から５歳児までの教育だけではなく、その後の小学校における教育についても理解しておくこと、さらにはその後の一生涯にわたる人間の学びの道筋について理解しておくことが求められる。子ども一人ひとりの未来に影響を与える仕事である幼稚園教諭・保育士は、国語のみならずすべての教科・領域について習熟しておかなくてはならない。

小学校教育において知識を身につける活動は、「聞く」ことが中心である。よく聞ける子どもは、学力がついていく。このことは学級懇談会で保護者に話題にしていく内容である。「聞く・話す」活動はとても大切で、この二つの領域は、分かれていない。文字言語では、読めるけど書くのが苦手というように、二つの活動が別々の学力ととらえるけれども、「話す・聞く」は常に同時に展開する。読めれば書けるかというと違う。小説や新聞を読む人はたくさんいるが、それらが書ける人となると少ない。「書く」が言語活動の最高のレベルと言える。

読解力とは、「文章を読んだときに、その内容を理解し解釈する力」のことである。

例えば、文章を読む際に最も土台となる語彙力や、文章の要点を発見し短くまとめる要約する力も読解力に含まれる。

日常の授業では、「読む・書く・聞く・話す」を学生に意識することを求めながら、語彙力の

必要性に気づかせ、読解力につながることを理解することが、実習日誌に連動することをおさえる。

(2) 授業計画

1	オリエンテーション（授業概要・授業計画・授業形態・評価方法の説明）、グループ編成、国語の歴史と国語の概観	9	「話すこと・聞くこと」⑤・「書くこと」③・「読むこと」② （総合的な指導の実際①指導計画立案について）
2	「話すこと・聞くこと」① （小学校国語科の目標および内容、グループワーク①「私の好きな絵本」口頭発表）	１０	「話すこと・聞くこと」⑥・「書くこと」④・「読むこと」③ （総合的な指導の実際②指導計画に基づく実践・省察・改善とその往還について）
3	「話すこと・聞くこと」②（グループ代表者による「私の好きな絵本」口頭発表）	１１	「話すこと・聞くこと」⑦・「書くこと」⑤・「読むこと」④ （総合的な指導の実際③グループワーク②模擬授業）
4	「書くこと」① （国語の歴史・「書くこと」―文字を中心に―）	１２	「話すこと・聞くこと」⑧・「書くこと」⑥・「読むこと」⑤ （総合的な指導の実際④模擬授業へのフィードバック）
5	「書くこと」② （国語の歴史・「書くこと」―文法を中心に―、具体的な実践場面での「書くこと」の指導）	１３	「話すこと・聞くこと」⑨・「書くこと」⑦・「読むこと」⑥ （総合的な指導の実際④授業の精度を高める情報機器の活用と多様な教材について）
6	「読むこと」① （国語の歴史・「読むこと」―文章を中心に―、具体的な実践場面での「読むこと」の指導）	１４	「話すこと・聞くこと」⑩・「書くこと」⑧・「読むこと」⑦ （総合的な指導の実際⑤授業の精度を高める多様な指導方法について）
7	「話すこと・聞くこと」③ （国語の歴史・「話すこと・聞くこと」―語彙を中心に―）	１５	まとめの復習、学習内容の理解度確認のための筆記試験、解説
8	「話すこと・聞くこと」④ （国語の歴史・「話すこと・聞くこと」―方言を中心に―実践場面での「話すこと・聞くこと」の指導）		

表１　令和３年度「言語表現」シラバス

（３）アウトプット

小学校、中学校、高校は、通常、先生の話を「聞く」、教科書を「読む」など、知識をインプットすることを中心に行われる。新しい知識を与えられることはとても大切なことであるが、それを一方的に続けられると、子どものやる気は持続しない。一方で、人に「話す」、ノートに「書く」など、自分の内側にある考えや情報を外側に表現することを「アウトプット」としての作業を折々に入れてあげると、やる気につながり、学習効果も高くなる。大学生も同じと考える。

ます、授業ではコミュニケーション・トレーニング（コミュトレ）から入る。

１年次前期は、人前で話すことに自信を持てるように、３分間スピーチや５分間スピーチ等、人前で自己紹介やニュース、新聞記事を見ての自分の意見を発表し、話し方の能力も同時に伸ばす。後期では話し方、聞き方の基礎や、司会の仕方も学んでいく。中でも、同じニュースでも切り口によって相手に伝える印象は違ってくる。この切り口を意識することが「アウトプット」する能力を高めることにつながる。

【１分間スピーチ・３分間スピーチ・５分間スピーチの実践例】

３分、５分の間で自己紹介や身近にあったこと、ニュースや記事を見ての自分の考えを話す。テーマ例（好きなもの、嫌いなもの、最近はまっていること、アルバイトをしていての出来事等）。

以下の観点について、「１５秒で自分に問いかける習慣を身に付ける」ことを常に意識させた。

①ニュース映像を利用して、②身近な話題から、③天気予報等、④スポーツニュースなど

※疑問：「何だろう？」「そういえば考えたことない！！」

※「ひと言尋ねる勇気」は、あなただけのネタが見つかる。

※「なぜそうなのか」「なぜそんなニュースが流れたのか」　など。

※相手の気づかない「切り口」でのアウトプットをめざす。

※「口火を切る」主体性をもつ。

このようなトレーニングを継続したことで、学生は、「本日、発言の機会をいただいた時、話しながら、聞いている人、聞いてない人を見つけました。特に０さんの目線はかなり届いて私の気持ちを届けたいと思ったし、聞いていないだろうという人には何らかの言葉をかけ何か伝わればいいという思いだった。発言した後の小話をしている人など、聞いてないような人は、特に目立つ。そのようにマイナスに見られないよう目線を向けることが大切だと思った。」と授業の振り返りで考察している。

学生は自分の話をしながら、聞き手の聞き方にも思いを馳せるようになってきた。

ある学生は「本日『文末表現』について学習したが、この文末表現は非常に難しく、『もっと適した文末はないだろうか』といつも頭を抱えている。しかし『教科書の表現を模倣する』『多様な文末表現を駆使する』という方法を学び、自身が『真似る』ことを習慣化できていなかったことに「ハッ」と気付かされた。これまでにも先生から『活字を読む』ことの大切さを幾度となく聴いているが、なかなかその習慣を取り入れられていない。今後教科書、新聞等を意識して読むよう心掛けたい。また授業冒頭では、保育者は『小学校教育についても理解しておく』『一生涯にわたる人間の学びの道筋について理解しておく』という話もあった。この点は保育者を志す者として忘れてはならないことだが、幅広く学習する意味でも新聞からの知識収集は非常に有効であろうと思う。やはり『活字を読む』ことに尽きるわけである。文章表現や言語表現において自身の考えをよりスマートに伝えられるよう、そして知識習得にも繋げられるよう『活字を読む』習慣化に努めたい。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は、「私は先日行われた立会演説会のことを伝えたいと思う。人前で話すことが苦手なのでとても緊張していた。メモを手元に置き指でなぞっていたものの途中で分からなくなってしまい伝えたいことが伝わっていない。

これは私の今から改善すべき点だと思っている。また、演説中あの場にいた全員に伝えたい！という思いしか持っていなかった。初めて全学生の前に立った時は足が震えた。しかし、その前の演説の方を聞いている時に会場の人を見ていた。正直なところ聞いている人もいれば聞いてない人もいる。」と授業の振り返りで考察している。

（4）新聞記事トレーニング

授業では、資料の活字は辞書を手元において根気よく読むようにする。気になった言葉はマーク（囲んだり、アンダーライン、サイドラインを引いたり、蛍光ペンでマーク）する。他教科や実習等のことが浮かんできたら書きこむ。気になったデータは調べる。気になったワードや研究は文献や資料で調べる。

ある学生は「一番に伝えたいことは真ん中に置いてそれに繋がるように意識するようにしている。しかし、正直に言うと自分ではしっかり話しているものの自信はないが、先生がよく褒めてくださるので気楽に話すことができた。私が思うには、自分の意見を伝えるのが得意な人と苦手な人の違いは自信があるかないかではないか。また、言いやすい環境も関わると思う。自分の意見を言った時に否定されないかなどを考えることがあるので、安心して伝えられる環境が必要でもあると思う。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は「言葉に『心』を乗せているか。非常に心に響く言葉だった。この言葉の紹介の際、先生が『ぶっきらぼうに言うのではなく、心を込めて』と説明された。恐らくだが、保育者という職務に就くと日々目まぐるしく過ぎていき、目の前でこなすべき業務に追われるあまり、言葉から『心』が欠けやすくなる＝ぶっきらぼうになりやすいのではないかと思う。しかしそうなってしまうと、保護者に寄り添ったコミュニケーションを構築するのは難しく、相手意識から遠のいている状況である。そうならない為にも、まずは今この振り返りシートに『心を込めること』、人と話す際には『言葉に心を乗せること』を忘れないようにしたい。そしてこれらを繰り返すうちに、どのような状況であっても常に『心』を乗せた会話を出来る人となりたい。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は「本日の授業もまた、『考える』ことがいかに大切かを感じる内容だった。（ 先生になれば ）難しい、答えのない問題が次から次に、しかも瞬時に『あなたの考えを求められることの連続』というお話には、先生という仕事の責任の重さに背筋が伸びる思いがした。対保護者との会話においては誰かが代わりに答えてくれることはなく、自身の言葉で答える必要がある。今は欲しい情報がほぼ全てインターネット上に載っている時代であるが、『瞬時』に考えが求められる状況でインターネットに頼ることもできない。ましてそれはインターネット上の考えであって、自身の考えとは言えない。やはり、常日頃から考えて自分の言葉で語ることが大切だと感じた。また『指示待ち』の話もあったが、指示がなければ動けないという姿勢では社会に出てからなかなか成長に繋がらない。『自分に何か出来ることはないか？』『今何をすべきか？』と自ら考えて行動することが成長に繋がるため、学生のうちから考えて行動することが現場での即戦力に繋がるように思う。

2 年後に現場で即戦力となる為にも、ここでの学びや日頃の興味関心から知識を増やし、自身の考えの幅を広げていきたい。」と授業の振り返りで考察している。

実習後にある学生とやりとりをした。「私は〇〇保育園、１０日間実習の初日からとても緊張した。子ども達に自分から話しかけるのが出来なくて不安だらけで、一日目はほぼ不安しかない状態だった。2 日目から少し慣れて自分から話しかけた。また先生の動きを真似するようにした。そのうち子どもたちも話しかけてくれ嬉しかった。子どもが喧嘩した時など『だめだよ』などの注意もできるようになっていた。日誌は毎日書くのはきつくて倒れそうになる時もあった。しかし、日誌を書くことで成長出来たし、振り返る事もできた。日誌での一番の苦労は最後まで書きることだった。先生たちの行動

をメモにとったが、日誌にまとめる文章表現や言葉の使い方が難しかった。」と話した。この学生にとっては実習日誌を書くだけで精一杯だったのである。ここからも筆者が担当する言語表現の重要性も明らかになった。

4　研究の考察

本研究の目的は、現場に求められる「考える力」のつく授業改善を進めることである。実習先訪問では毎年のように繰り返される日誌の誤字脱字、文章表現等の指摘を受ける。学生は「文章が苦手、話すことが苦手」という意識を変えることは難しい。

ある学生は「今回の授業ではこの前に送った私の振り返りがたくさん紹介されていてとても驚いた。私は入学してすぐの授業の時は紹介されている方の振り返りを見ているだけだった。しかし授業を受けていくにつれ、だんだん自分もこのような振り返りを書けるようになりたいという強い気持ちを持つようになった。それからは他の方の振り返りのいいなと思ったところを真似するようになった。特に真似しているのは最初から振り返りシートに書くのではなく一度他の紙に書いてから振り返りシートに書くようにしている、というものである。こうすることで時間はかかるが、自然と頭の中が整理されていくので前よりもスラスラと書けるようになった。いずれは最初から振り返りシートに書いても頭の中を整理できるようになりたいと思う。紹介されるのは少し恥ずかしかったが、成長してきているのが分かったし、これからのモチベーションに繋がると思った。これからも自分の成長のためにクラスの方の振り返りをしっかりと聞くようにしていきたい。」と振り返りのなかで考察している。

ある学生は「私は振り返りを送信する際に読み返すようにはしている。しかし、スライドに紹介された自分の文章を読むと、ところどころ日本語のおかしい箇所があったことに気がつき、とても恥ずかしく思った。だから、もっと客観的に文章を読み返す癖をつけ、読んでいただく人に伝わりやすいようにという意識を忘れないようにしたい。」と、振り返りで考察している。

言語表現の授業では常々、２年後には、短大・専門学校の卒業生も、４大の卒業生も就職年の４月には同じスタートラインに立つことを意識させた。１８歳人口の減少並びに、女子の４大志向が高まっている中であっても、短期大学・専門学校は、２年間で「実践力を備えた即戦力」となる人材を保育界に送り出さねばならない。短大の存在意義を確認しても、おそらく４年生大学への流れが止まるわけでもない。しかし、短大は送り出す学生の質を４年生大学並み、またはポテンシャルを持つ学生に育てるところに来ているのである。

5　まとめ

ある学生は「今回の授業では学び合いが生まれる教室の重要性を知った。授業を受けて改めて考えてみると自尊感情を持てないまま大人になる子どもはほんとに多いなと感じた。私は短大に入学して授業を受けてから少し自尊感情を持てるようになったと感じている。その理由はやはり振り返りシートだと思う。先生は毎回振り返りシートを送るとコメントを一人ひとりに返信されている。このコメント返信も自分が伝えたいと思っていることを汲み取ってくださる。また、授業ではクラスメイトの振り返りをスライドにして紹介され解説をされている。この振り返りシートを見る時間があるおかげで学び合いというのも自然とできている。学び合いやお互いを尊重し合うことで自尊感情が高まることに繋がるのだなと感じた。褒められるというのはいくつになっても嬉しいものである。私も保育者という立場になったら子どもと一緒に学び合い、子どもが話しかけてきたときには、何を伝えたいかをしっかりと汲み取れるようになりたい。そして悪い所ばかりを見て叱るのではなく、いい所を褒め、子どもの個性を伸ばせる保育者を目指したい。」と書いている。

学生の振り返りに「学び合いが生まれる教室

の重要性を知った」という言葉が印象的であった。教員が学生の誤字脱字を見つけてもそれをフィードバックする仕組みがないと学生は気づかない。２年間という短期間にいかに個人差を一定レベルまで引き上げるかは、「学び合いが生まれる教室」こそ、短大生には必要なのである。筆者は実習先訪問に力を入れる。っそれは、個々の学生の次の一手につながる課題が見つかるからである。実習先訪問の各教員の情報をいかに共有するかである。その上で全教員が当該学生にフィードバックしていく取り組みが大切である。

【参考文献】

（１）中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学「短期大学の今後の在り方について（審議のまとめ）」２０１８年
（２）多田陽子・関谷みのぶ「『自ら学ぶ』ための短大２年間の連続した保育者養成―協同学習の視点からの考察―、教育保育研究第３号、２０１７ｐｐ５１－６１
（３）長島和代他「保育の基本用語」わかば社、２０１７
（４）長尾佳代子他「大学１年生のための日本語技法」ナカニシヤ出版、２０１８
（５）篠原京子他「保育者をめざす人のためのことばの表現」建帛社、２０１９
（６）増田泉他「大学生のための国語表現」東洋館出版社、２０１９
（７）小宮山博仁「社会にでて役立つ勉強法」あすとろ出版、ｐ１０５、１９９８
（８）発達「ことばとコミュニケーションの発達」ミネルバ書房
（９）全国保育士会研究紀要委員会「保育研究の考え方・すすめ方」
(10) 中谷素之「学ぶ意欲を育てる人間関係づくり」金子書房、２０１３年、ｐ２８
(11) 細川英雄「自分の＜ことば＞をつくる」ディスカバー携書、２０２１
(12) 野矢茂樹「大人のための国語ゼミ」山川出版社
(13) 村上慎一「読解力を身につける」岩波ジュニア新書
(14) 多田孝志「共に創る対話力」教育出版、２００９
(15) 加藤昌男「ことばの伝達力」ＮＨＫ出版